

戯曲

デ
イ
オ
ニ
ユ
ス

—闇の神性—

II

正
道

SEIDOU

目次

ディオニュソス 闇の神性Ⅱ

全体の目次	3
-----------------	---

第5章 ティーシポネ

登場人物	7
深夜	8
明け方の王城	10
朝の顔合わせ	12
城の中庭	17
再び、城の中庭	22

第6章 イルカになった水夫たち

登場人物	27
オルコメノスの海岸	28
マイオニア号	29
出航したマイオニア号	37

第7章 シレノスとの再会

登場人物	47
フリギアの海岸	48
道ゆき	51
キュベレー女神の神域	55

第8章 大地母神キュベレー

登場人物	61
キュベレーの神殿	63
葡萄酒の恵み	70
キュベレーの秘儀	74
開門	81

ディオニュソス 闇の神性Ⅱ

全体の目次

第1章 ザグレウス

第2章 セメレー

第3章 小鹿と葡萄酒

第4章 イノーとアタマース

第5章 ティーシポネ

第6章 イルカになった水夫たち

第7章 シレノスとの再会

第8章 大地母神キュベレー

第9章 虚無への降下

第10章 無からの創造

第11章 ヘルメス・トリスメギストス

第12章 曙光

第5章 ティーシポネ

登場人物

ティーシポネ エリニウス（復讐の女神）のうちの一柱。鮮血のティーシポネと綽名されている。

ディオニュソス ゼウスとセメレーの間の子。酒の神。

イノー ディオニュソスの伯母にして、オルコメノス王国の王妃。

アタマース イノーの夫。オルコメノスの王。

レアルコス アタマースとイノーの子。長男で七歳。

メリケルテース レアルコスの弟。次男で五歳。

ゼウス オリュンポスの最高神。

深夜

オルコメノス王城の門の前。自分が持っている松明の炎で、不気味に浮かびあがるティーシポネの顔。背景は暗い。炎だけが妖しく揺らめいている。

ティーシポネ（独白）エリニウス、エリニウス、エリニウス。復讐の血、血の復讐。呪い、呪い、呪い。もう止まりはしない。やんごとなき方からの依頼が、この私を動かしたからには。闇夜の深き汚泥の中から生まれた復讐の女神、エリニウスとは私たちのこと。そして、そのエリニウスのなかで最も残忍な、最も血に飢えた女神が私。鮮血のティーシポネ。それが私、私、私。

〔ティーシポネ、血色の松明を振り回しながら、オルコメノスの城門をくぐる。すなわち、閉じられた門扉を、霊のごとく突き抜けて〕

ティーシポネ ヘラさまは、あの汚らわしい地下世界まで降りてきて、こう言った。ディオニュソスを呪い、ディオニュソスを愛する者をなおのこと呪えと。腐った狂気を奴らに吹き込み、奴らの心から鮮血を吹き立たせるようにと。おお、エリニウス、エリニウス、エリニウス。どこだ、その獲物は。私の呪いの餌食は。さあ探せ、この目よ。捕まえよ、この手よ。

〔王宮のなかに、眠っているディオニュソスを見つける〕

ティーシポネ いた。見つけた。ここに。神の子を、あのゼウスの血脈を。だが、ああ、ゼウスの血の何と輝かしいこと。この深い闇のなかでさえ光り輝き、このニクス（夜）の娘を寄せ付けけないではないか。なんということ。なんと忌々しいこと。これでは私の狂気を吹き込むことも出来ぬ。

〔ディオニュソスの酒壺を見つける〕

ティーシポネ これは何だろう。この壺には、神の子〔ディオニュソス〕の匂いが染みついている。なのに何故だろう。この壺からは、同時に、私の狂気と近いものが感じられる。なにか狂気の種子のような、私たち呪い呪われた者らの近親者のような。そして、ここになれば、私の狂気を注ぎ入れることは容易い。私の血を沁み込ませることは容易い。

〔ティーシポネ、酒壺のなかに狂気と血を注ぐ〕

ティーシポネ これでいい。これで、あとは静かに事のなりゆきを眺めていればいい。なにせ、もう夜が明けようとしている。

明け方の王城

イノーの指示のもと、城で仕えている女たちが、盛大な宴の準備を始めている。そうした忙しさの中にあるイノーに、起きたばかりのディオニュソスが話しかける。

ディオニュソス これは何の騒ぎなのですか、伯母上。

イノー 伯母上だなんてよして、ディオニュソス。お母さんでよいのですよ、この私を呼ぶときには。だって、この宴も、私たちの王家に新しい子供が加わったことを祝うためのものなのでもの。さあディオニュソス、どうか楽しみにしていてね。これから美味しい料理をたくさん作って、それを城内中の人たちに振る舞うから。そして、その全ての人たちに、あなたという子の訪れを祝わせるの。

ディオニュソス そんな事までしてくれるのですか、おば……お母さん。

イノー お母さん……そうよ、だってお母さんは嬉しくて仕方ないんですもの。何よりもあなたに出会えたことが。レアルコス、メリケルテース、ディオニュソス、みんな私の可愛い息子たち。

ディオニュソス ありがとうございます。他には何も言えません。

イノー 何も言わなくていいわ。ただ一緒に食べて大いに楽しみましょう。ほら、ここまであの大釜の料理の匂いがしてくるわ。

ディオニュソス 本当だ。ああ、いい匂いですね。

イノー もうすぐアタマースや子供たちも起きてくるわ。あなたも身支度していって下さい。ただしセメレーの服を着てね。

朝の顔合わせ

テーブルを囲むアタマース、イノー、リアルコス、メリケルテース、ディオニュソス。ディオニュソスは紫色のワンピースを着ており、その目前に小さな酒壺が置かれている。またテーブルの背後にはティーシポネが立っているが、その存在に誰も気づかない。

リアルコス（テーブルの下でディオニュソスを指さしながら、小声で）メリケルテース、やばいぞ、かわいい。

メリケルテース まるで女の子だよね。好きになっちゃいそう。

〔息子たちのヒソヒソ話を中断する形で、アタマースが喋る〕

アタマース レアルコス、メリケルテース、今日のかねてから言っておいたとおり、新しく家族に加わったディオニュソスのために、盛大な歓迎会を執り行う。すでに準備は出来ているようだから、あとは家臣たちの前に、私たちが出て行けばいい。

イノー（息子たちに）ただね、その歓迎会では、ディオニュソスのことを、女の子として紹介しなければならないの。

アタマース そう。だから今、歓迎会に入る前の今、私たち家族だけで、ディオニュソスに歓迎の挨拶をしようと思うのだ。息子としての、本来のディオニュソスに対してな。ではまず私から。ディオニュソス、ようこそ私たちの家庭へ。

イノー ようこそ私たちの息子。

レアルコス ようこそ、僕の弟。

メリケルテース ようこそ僕の……弟。

ディオニュソス ありがとう。お父さん、お母さん。ありがとう、兄さんたち。

アタマース これで君は、私たち家族の正式な一員だ。

ディオニュソス うれしいです。本当にうれしいです。こんなに嬉しいことはない。本当に、本当に。

イノー そう言ってくれることが嬉しいわ、私たちも。

ディオニュソス ああ、こんなにも沢山の幸せを、一度に貰ってしまっていていいのでしょうか。正直言って、幸せすぎて怖いぐらいです。これまでの人生のなかで、こんなにも安らいだ時間は決してなかった。こんなに純粋な幸せをもらったことはなかった。僕からは何も、皆さんにしてあげられる事はないのに。

アタマース 家族の中では「貰ったから返す」なんてことほど無粋な事はないんだよ、ディオニュソス。君が幸せならば、家族の一員が幸せならば、そのこと自体が、家族にとっては嬉しいことなんだ。

ディオニュソス そんな道理は知りませんでした。これまで僕には家族がいなかったから。でも。すごく嬉しい言葉です。本当にありがとうございます。ただお父さん、無粋かもしれないけれども、どうか僕から、一つだけお返しをさせて頂けませんか。そうし

ないと感謝の気持ちが胸でつかえて、どうしても心が苦しくて。

アタマース 君がしたい事があるならばすればいい。私たちは何もいらないが、君がしたいことを止めようとも思わない。

ディオニュソス では、この壺の中身を皆さんに贈りたいと思います。

イノー その壺、たしかにずっと、気にはなっていたの。

ディオニュソス この壺の中身は「酒」という名前の液体です。飲みすぎると、眠くなったり身動きが取れなくなったりしますが、ほどほどであれば、気持ちをウキウキとさせてくれる、けっこうな飲み物なんです。

アタマース 君が私たちに贈ってくれるものだ。さぞかし楽しい飲み物なのだろう。喜んで頂くとしよう。（部屋の外に聞こえる声で）侍従たち、杯を用意せよ。

〔侍従たちの手により、王家の面々の前に陶製のグラスが置かれる。ディオニュソスの手ずから、そこに酒壺から葡萄酒が注がれる。これを見て、背後のティーシポネが笑みを浮かべる〕

イノー 甘い、いい匂いだわ。

レアルコス きれい。

メリケルテース はやく飲みたい。

アタマース では頂こう。乾杯。

ディオニュソスを含めて一同 乾杯。

〔飲んだとたん、全員が苦しみだす〕

ディオニュソス はっ、く、なんだ、体が変わだ。たった一口飲んだだけなのに身動きが取れない。

アタマース ディオニュソス……これは一体……ああ、頭が揺らぐ。

イノー あなた、胸が苦しいわ。

リアルコス 体が動かないよ。お父さん、怖いよ……

メリケルテース 頭がぼうっとする。気持ちが悪い。

アタマース（突然怯えて）何かいる。何かが、私に向かって襲いかかろうとしている。

ティーシポネ（アタマースの耳もとに囁いて）それは獅子ですよ。雌獅子と、あと仔獅子が二頭いるのです。そのままでしたらお前を噛み殺しますよ。さあ、槍を持って戦いなさい。

アタマース やられてたまるか！

〔アタマース、槍を手に取り、イノーと二人の息子たちに向かっていく。イノーは子供たちの手を牽いて、不自由そうに走り逃げる〕

イノー やめてアタマース。あなた、私たちですよ！

〔アタマース、イノーたちを追って部屋から出る。ディオニュソスも皆を追おうとするが、誰よりも彼が、いちばん体の自由を奪われてしまっている〕

城の中庭

家臣たちが祝宴の準備を整えている。豪華な料理が入った大鍋、大型のテーブルが並ぶ。そこを舞台にして、恐ろしく凄惨な、阿鼻叫喚の地獄絵図が描かれることになる。逃げるイノーたち。それを追いかける槍使いアタマース。

アタマース エイホー、エイホー。なんて広々とした草原、まったく狩りは楽しい。

リアルコス やめて父さん！

アタマース 仔獅子が猛々しく吠えている。

イノー 来ないであなた！

アタマース さすが親獅子、声の迫力が違うな。行くぞ。

イノー お願い！

〔アタマースが放った槍が、リアルコスの足に刺さる〕

メリケルテース 兄さん！

アタマース 槍が当たった。仔獅子の一匹に命中だ。だが、まだ息がある。危険だ。

リアルコス 痛いよ、助けてお母さん！

イノー 何をするのよアタマース！

アタマース 誰の声だ？ 人の声のようだったが。誰だか知らぬが教えてやろう。凶暴な獅子の仔は、こうするのだ。

〔アタマース、リアルコスを持ち上げて、近くの石にその顔を打ちつける〕

イノー ギャーッ！ レアルコスが。私の愛しいリアルコスが！

アタマース やったぞ、あとは親獅子と、もう一匹の仔獅子だけだ。

〔アタマース、メリケルテースに向かって槍を振り上げる〕

イノー あなた、もうやめて！

〔イノー、咄嗟にアタマースの槍を掴む。すると、それが偶然アタマースの胸に突き刺

さる]

アタマース ガッ！ ぐ……イノー……？

イノー アタマース、アタマース。

メリケルテース お母さん……お父さんを殺したの？

イノー メリケルテース、お母さん、何を……

ティーシポネ（イノーの耳に囁きかける）お前には、こんな現実は認められまい。だから私が楽にしてやろうね。もうお前にはアタマースの姿は見えない。そしてほら、お前の目の前にいるのは、メリケルテースなどではない。それはただの猪の肉だ。料理の材料だ。だってほら、お前は料理を作っている最中だったじゃないか。

イノー そうだわ。ディオニュソスを歓迎するための料理を作らなくちゃ。

〔イノー、メリケルテースを抱いて、大鍋に走り寄る。その体の動きには、酔いによる不自由さなどは微塵もない〕

メリケルテース 母さん、なに、やめて、やめて！

イノー ディオニュソス、新しい息子よ待ってなさい。いま美味しい猪鍋が出来上がりますからね。

〔イノー、大鍋にメリケルテースを放り込む〕

メリケルテース ギャーッ！ ブクブクブク……

イノー（正気に戻って）え、なに、メリケルテース、メリケルテース？ あたし何を、あたし何をしてるの？

ティーシポネ お前は息子を殺しているんだよ。ひどい母親だね。

イノー そんな……うそ……

ティーシポネ どうする、この悪夢から逃れたいかい？ 逃れたいならあたしに付いておいで。

イノー は、はい。

〔ティーシポネ、城郭を突っ切って海に向かって走る。イノーがその後を追っていく〕

ティーシポネ 早く。もっと早く走らないと、夢から醒めないよ。

イノー はい。

ティーシポネ おいで、ここだよ。

〔断崖で手を広げるティーシポネと、その胸に突っ込むイノー。二人が触れ合ったと思われた瞬間、イノーの体は断崖から落下してしまう。その体は当然、奈落の底にある海へと沈む〕

再び、城の中庭

建物のなかから中庭へ、ゆっくりとディオニュソスが出てくる。酔って辛そうな様子。だが、それ以上に、眼前の惨状が彼を苦しめることになる。ディオニュソスが目にしたのは、家臣たちが集めて並べた、アタマース、レアルコス、メリケルテースの遺骸だった。

ディオニュソス うそだ……僕の酒のせいでみんなが……僕のせいでみんなが……

〔ディオニュソス、手に持っていた酒壺を地面に叩きつける。壺が割れて酒がこぼれる〕

ディオニュソス こいつのために、こんな酷いことが起きたんだ。アッ！

〔葡萄酒を吸った地面から、急速にブドウの蔓が発芽する。その蔓がディオニュソスの頭に絡まる。まるで蔓の王冠のようであるが、その王冠から葡萄酒が滴り落ちて、赤紫色にディオニュソスの頬を染める〕

ディオニュソス 僕は……どうしても、この酒から逃れられないのか。こんなにも恐ろしい飲み物から。

〔ディオニュソス、家臣たちが運んできたイノーの水死体を目にする〕

ディオニュソス ああ、母さん、母さん、あなたまでが！ ああ、あああ！

〔叫ぶディオニュソスの背後に、ティーシポネが立つ〕

ティーシポネ もはやこの神の子に、かつての輝きはない。これならば、私の毒気は何の抵抗もなしに、この子供の体に入っていこう。

〔ティーシポネ、身をかがめて、ディオニュソスに口づけをする〕

ディオニュソス（急に狂って）アアーッ！ ヘラ、ヘラ、ヘラ、ギャー、ギャー、ヘラが来る。ヘラが僕を追いつめる！ ヘラが、ヘラが！

ティーシポネ フッ、これでよい。これでヘラさまの依頼は果たせた。復讐は為されたのだ。エリニウス、エリニウス、私も冥府に戻るとしよう。

〔そう言うティーシポネの背後に、ゼウスが立つ〕

ゼウス これほどの事をして置いて、すんなり去ってもらう訳にもいくまい。

〔ゼウスが雷の剣を振り下ろす。その剣に裂かれながら、ティーシポネが冥府に消えていく〕

ゼウス（ディオニュソスに）息子よ、なんと哀れな姿に……出来るかぎりお前の狂気を払ってやるが、その全ては、どうやら振り払えぬようだ。お前自身が、すべての狂気を失うことは拒否しているようだからな。

ディオニュソス ヘラ……ヘラ……

ゼウス お前はきっと、このあまりにも大きな悲しみに直面することを恐れているのだろう。良くも悪くも、こうして狂っていれば、その悲劇から目を逸らしていただけるからな。だが、こうやって私の息で体を包んでやれば、少しぐらいは、人の言葉を解せるようになるだろう。

ディオニュソス ……何だろう、なにか懐かしい声がしていたような。

ゼウス もう多くは語るまい。その半ば狂った頭では、私が多言を弄しても、それを覚えてはくれまいからな。ディオニュソス、だからこれだけを聞け。お前はフリギアに行くのだ。そこで大地母神キュベレーに会い、彼女にその狂気を振り払ってもらうのだ。かの女神だけが、お前の狂気を癒すことができる。

ディオニュソス フリギア……キュベレー……

第6章 イルカになった水夫たち

登場人物

ディオニュソス 主人公。まだ七歳の少年神であるが、痛ましくも、いまは狂気の淵にある。

アケテス 商船マイオニア号の船長。星座の位置を頼りに、船の航行進路を決める技術を持っている。

ディクテウス 船員で見張り役。深謀遠慮のタイプだが、性格は腹黒い。

メラントス 船員で舵取り。ディクテウスに比べると浅慮である。だが、腹黒いところは全く同じ。体つきが細い。

リカバス 船員で雑用係。乱暴者で体が大きい。

オルコメノスの海岸

港湾に停泊しているマイオニア号。メラントスとリカバスが、生活必需品を買いに、街に出ている。彼ら二人の帰りを、船長のアケテスと、見張り役のディクテウスが、首を長くして待っている。

ディクテウス ようやく見えてきましたぜ、船長。あの体の輪郭は、たしかにメラントスとリカバスだ。けど、おや。

アケテス どうしたディクテウス。

ディクテウス あの二人のあいだに、誰か子供が挟まれてるな。いや、女かな。

アケテス つまり、なにか厄介ごとを運んできたということだな、まったく。

マイオニア号

船に戻ってきた舵取りメラントスと、雑用係のリカバス。二人が連れてきた子供こそが、われらがディオニュソスである。

メラントス いやはや船長、オルコメノスの街は大変な騒ぎになってますぜ。

アケテス 騒ぎとは。

メラントス 何でも、王の一家が、急に死に絶えてしまったそうで。

アケテス 急に？ アタマース王やイノー王妃がか。信じられん。

メラントス しかも、王子二人も一緒にです。

アケテス どうしてそんなことに？

メラントス そこまでは分かりません。でも、その騒ぎの恩恵は受けましたよ。へへ、というのも、金を出して買い物をするかわりに、タダで物資を失敬することが出来たんです。だから財布の中身は、ちっとも減っておりません。な、リカバス。

リカバス うほ。

メラントス どうです、褒めてもらえましょうな、船長。

アケテス 火事場泥棒というわけか。呆れた奴らだな。怒鳴ってやりたいところだが、それよりも、その女は何なんだ。

リカバス それが女じゃないんずら。オレっち真っ先に確かめたけれども、ついてるもんが付いてるんずら。

アケテス 女とみたら、さっそく強姦しようとしたということか。真っ先に確かめたとは、要するにそういうことだな。

メラントス リカバスだからしょうがないでしょう。コイツにあるのは、力と本能だけです。それは船長も、よくご存じでしょう。

アケテス まったく……で、この女ではない子供はどうしたのだ。

リカバス 海岸を四つん這いで歩いてたんずら。

メラントス ええ、そうなんです。まるで手負いの鹿みたいに、フラフラヨタヨタ。

アケテス 四つん這い？ どういうことだ、それは。

メラントス どういうことだと言われましてもねえ。こいつ、本当にデタラメが集まっ

たような奴なんですよ。動物みたいに歩いてるのに、着ている服は最上級の生地で出来ている。男なのに女の格好をしている。こんなにキレイな顔立ちなのに、どうやら狂っているか馬鹿らしい。ほら、何もかもがトンチンカンだ。

アケテス 狂ってるだって？（ディオニュソスに）おい、お前、私の言葉が分かるか。名前は何ていうんだ？

ディオニュソス（少し落ち着いて）ディオニュソス……誰なの……あなたたちは。

アケテス 今度は自分から喋ったぞ。どうやら半分狂っていて、半分まともなんだ。つまり半狂乱というやつだな。

ディオニュソス 誰……僕をどうするつもり？

アケテス どうもしない。我々は商売のために各国を回っている船乗りだ。君が放っておいてくれと言うならば、そのままこの場所に置いていくだけだ。

ディオニュソス 船？ この船はフリギアにも行ける？

アケテス ああ、行けるだろうが、お前はフリギアに行きたいのか。

ディオニュソス そこに逃げないと、ヘラに追いつかれるんだ。（叫んで）ヘラ、ヘラ、ヘラ、どこまで僕を追い詰めれば気が済むんだ！

アケテス どうやら、ヘラ女神に追われている悪夢と、現実とが混じり合ってるみたいだな。そういう世界に生きているのだ、このディオニュソスという子供は。そしてフリギアまで行かないと、ヘラ女神から、金輪際逃れられないらしい。

メラントス ああ哀れなり。ハテどんな不敬で女神を怒らせたもうたか、ねえ船長。

アケテス 茶化すなメラントス。正直、こんなに幼い子供が悲鳴を上げているのを聞くと、私などは本気で可哀そうになってくるよ。

ディオニュソス ハア、ハア、フリギュア……僕をフリギュアに連れていってくれたら、父さんに言って褒美を贈ります。だから僕を船に乗せてください。

ディクテウス ご褒美だって？

メラントス 父さんて、お前の父さんは誰なんだ。

ディオニュソス ゼウス。

アケテス やっぱり狂ってるんだ。変な期待はしないほうがいい。

メラントス でも船長。このディオニュソスってガキが、やたらと上等な服を着てるのは事実なんだ。顔立ちも高貴そうだし、肌つやもいい。こいつと一緒に連れていけば、どこかで探し人の情報が入るかもしれませんぜ。

アケテス 探し人の情報だって？

メラントス そうですよ。「私たちの子ディオニュソスを連れてきてくれたら、大枚を払います」っていうような。そうでさ、どこぞの王家からとか。早ければ、このオルコメ

ノスの王家からでも。

ディクテウス バカ言うなメラントス。オルコメノスの王家は、いまメチャクチャなんだろう。たとえコイツが王子さまだとしても、誰も探しやしないさ。

メラントス あ、そうか。

ディクテウス もっと現実的に考えるんだ。いま確かなのは、ここに美形で白痴の子供がいるということ。そして、キレイで馬鹿なら、それは理想の性奴隷になるってことじゃないか。エジプトででも売り払えば、相当な額の金が手に入るだろうよ。

アケテス きさま、何を恥知らずなことを！

〔メラントス、アケテスを押さえつける〕

メラントス ディクテウス、今がその時だな。

ディクテウス ああ。

アケテス 何を言っているんだ！

メラントス ディクテウス、コイツに構わず教えてくれ。性奴隷の話は本当なんだな。

ディクテウス（ディオニュソスの髪をつかんで）俺が知ってるエジプト人もそういうの

が好きでね。少年好きというやつだな。こんなにキレイなガキなら、本当にいくらでも払うんじゃないか。

アケテス（押さえつけられながら）放せメラントス。

メラントス 俺じゃ長くはもたないな。リカバス、代わってくれ。

〔リカバス、アケテスを羽交い絞めにする〕

アケテス リカバス、お前もか！

ディクテウス 悪いが船長、俺たちは、それほどあんたに忠実な部下ではないんだよ。いつも、何かあったらあんたに逆らおうと話し合っていたぐらいだからな。

メラントス そして、今がその時になったわけだし。

アケテス はなから裏切る気だったのか！

ディクテウス とにかく、あんたは頭が固いんだ。せっかくいい儲け話があっても、ちょっとキナ臭いだけで、それをアッサリと蹴っちまうんだからな。そういう場面で、俺たちがどんなに歯噛みしていたか分からないだろう。

リカバス 俺たちは金が欲しいんずら。

メラントス だから、これからはディクテウスに船長をやってもらう。

アケテス みんな俺が正式に雇った者たちなのに。

ディクテウス 正式な生き方では物足りないのが俺たちなんだよ。

アケテス どうするんだ。俺をここに放り出して出航か。

ディクテウス いや、あんたも連れていくさ。あんたの航行術がないことには、俺たちも、進む先が分からなくなっちゃうからな。

アケテス 下種が！

メラントス さあ、そうと決まれば、早いほうがいい。元船長にディオニュソスよ、マストに縛りつけさせてもらうぜ。

ディクテウス 出航だ。

ディオニュソス（縛られながら）どこに行くの？

メラントス もちろんフリギアさ。

出航したマイオニア号

船には二本の帆柱が立っている。その一本にはアケテスが縛りつけられ、もう一本にはディオニュソスが縛りつけられている。かかる二人を無視して作業する船員たち。すなわちディクテウス、メラントス、リカバスの三人。

アケテス おい、こっちはエジプトの方向じゃないぞ。

ディクテウス（アケテスの腹を蹴ってから）馬鹿が。俺たちだって、最初の一步ぐらいは分かるんだよ。

メラントス（アケテスに）そりゃ細かい航路となれば、あんたの力を借りなくちゃなりませんさ。でも今は、おおよそでエジプトの方向に進んでりゃいい。そして左がフリギア、逆に、こうして右に進めばエジプトに近づくってことぐらいは、ちゃんと俺たちにも分かってるんだ。

アケテス くそ……息が出来ない。

ディオニュソス エジプト？ フリギアに向かっているんじゃないの？

ディクテウス うるせえな。お前はヘラヘラ唱えてればいいんだよ。

ディオニュソス 騙したの？

リカバス 騙したんずら。

ディオニュソス ひどい、ひどいよ。こんな子供を騙して何になるの。

メラントス 金になるんだよ。ハハハ。

ディクテュス そりゃ違う。ハハハ。

ディオニュソス なんでお金なんか。

ディクテュス 何を言ってる、この世は金がすべてよ。そう言うお前は、みっともない蔓草の冠をしてるが、金さえあれば、その葉っぱの冠を、黄金の冠にすることだって出来るんだぜ。

メラントス あれ、コイツそんな冠してたっけ？

ディオニュソス 蔓草の冠……ブドウの……僕はまだそんな物をしているの。それともまた生えてきたのかな……

メラントス なんだった？

ディオニュソス 僕はまだ、あの人を不幸にするばかりの酒から逃れられないのか。

メラントス また訳の分からないことを言ってやがる。やっぱり狂ってるんだな。ハハ、おいディオニュソス、そこにヘラ女神が追ってきてるぞ。

ディオニュソス ど、どこに！ やめて、お願いだからヘラさま、ああ、僕は何もやってないじゃありませんか。許してください。キュベレー、キュベレー、早く僕を助けてください！

アケテス ひどいことを言うなメラントス、こんなにも怯えてるじゃないか。

メラントス（アケテスの腹を蹴りながら）うるせえんだよ、てめえは。

アケテス ぐっ！

ディオニュソス ヘラ、ヘラ、ヘラ！

ディクテュス しかし航海中ずっとこの調子で叫ばれるのも、うるさくてかなわんな。

メラントス 口をふさごうか。

ディクテュス いっそ船底にでも放り込んだ方がいいんじゃないのか。

メラントス じゃあ、とりあえず帆柱から離すか。縄を解いて、って、あれ、もう解けるな。

リカバス そんなはずないずら。きつく結んだずら。

ディオニュソス（ 俯きながら、ドスの効いた声で ）ねえ。

メラントス（ 縄を放りながら ）なんだ。

ディオニュソス おじさんたち、僕を騙そうとしたんだったよね。

ディクテュス ああ、そうだ。

ディオニュソス じゃあ、お父さんに言うまでもないや。僕がご褒美をあげる。

メラントス ああ、何だって？

〔ディオニュソスの冠が伸びて、あたり一面がブドウの蔓だらけになる〕

ディクテュス うわ、なんだこれは！

リカバス ブドウの房が生えてきたずら。

メラントス 体に蔓が絡まってくる！

〔水夫たちに絡まった蔓が、人の手のように彼らを動かし、ぶどうの房の下で、その口を開かせる〕

ディクテウス なんなんだ。

〔ブドウから、その汁（酒）がしたたり落ちる〕

ディオニュソス 飲んでごらん。美味しくも忌まわしい、狂気の飲み物だよ。

アケテス（彼だけが事態の傍観者として）なんてことだ。

水夫たち アッ、アッ、アー！

〔三人とも苦しみもがき、ついには海に飛び込んでしまう。そうして飛び込んだ瞬間、彼らはイルカに変身してしまう〕

アケテス き、奇跡だ。

ディオニュソス（イルカを見て怖がりながら）何この生き物？ 僕知らない。僕知らない。僕知らない。

アケテス（独白）なんだ、怯えているのか。

ディオニュソス（頭を抱えながら）ああ、ヘラ、これもヘラがやったの？

アケテス ヘラだと？ バカな。

ディオニュソス もうやだよ、ヘラ、もうやだよ！

アケテス（独白）……この少年が、偉大な神であることは間違いない。だが、こんなにも強大な力を持ちながら、この神は、それを自分が使ったかどうか分からないんだ。そんなにも力を使いこなせてないんだ。そうとは思えない。

ディオニュソス ヘラ、ヘラ、ヘラ！

アケテス 狂気が、力の制御を阻んでいるのか。

〔ディオニュソス、舟板に手をついた状態でおとなしくなる。もっとも、それでも息は荒く、その荒い息の音とイルカたちの鳴き声だけが聞こえる。またブドウの蔓も、今はみんな縮んでしまって、ディオニュソスの冠としてのみ残っている〕

ディオニュソス（俯かせていた顔を持ち上げて）おじさん……

アケテス はい……私もイルカにされるのですか。

ディオニュソス そんなことしない。イルカなんて知らない。そうじゃないんだ。ねえ、おじさん僕のこと助けてくれる？

アケテス あなたが私を助けてくれるなら、何でもやりましょう。

ディオニュソス 僕は何もしない。だからお願い、僕をフリギアに連れてって。

アケテス そういえば、それが最初からあなたの願いでしたな。あなたさまは、そこで何をなさるつもりなんですか。

ディオニュソス フリギアのキュベレー女神だけが、僕の狂気を直してくれるんだ。

アケテス 狂気を……確かにあなたから狂気が除かれたならば、さぞや偉大な神になれるでしょうな。

ディオニュソス 僕には、そんなことは分からない。

アケテス 私はそれを確信していますよ。そこで私からもお願いがあります。あなたの狂気が払われた暁には、このアケテスめを、あなたの信者第一号にしてくださいませ。

ディオニュソス 信者だって？

アケテス そうです。私はあなたをフリギアに連れていったら、そのままこの船で、あ

あなたが帰るのを待っています。ですからあなたは、帰りもこの船に乗って、そうして一緒にギリシアに戻しましょう。あなたはギリシアで、偉大な神々の一柱となるべきお方です。

ディオニュソス 本当に僕には何も分からないんだ。とにかくフリギアに連れて行ってほしい。僕に分かるのはそれだけなんだ。

アケテス 分かりました。行きましょう。

第7章 シレノスとの再会

登場人物

アケテス マイオニア号の船長。

シレノス 半獣半人の老人。馬の耳と足、尾を持っている。かつてディオニュソスがザグレウスだった時代、その養育係を務めていた。

モルティ 十八歳の少女。大地母神キュベレーに仕える信女。キュベレーの祭儀にあって中心的な役割を担う信女の一人で、本書では、この役割をもった信女をマイナスと呼ぶ。したがって簡略に示せば「モルティはマイナスの一人である」ということになる。

ディオニュソス いまだ狂気のうちにある、われらが主人公。

☆ **アフロディーテ** 愛と美の女神。時代を下るが、冥界のペルセフォネーに「美しさ」を分けてもらおうとしたことがある（プシュケーの物語）。となればペルセフォネーは、美の女神にまさって美しいことになる。

フリギアの海岸

着岸したマイオニア号。アケテスがディオニュソスを背負って上陸しようとしている。その二人を、陸の側から支えるシレノスとモルティ。

アケテス 一体あなた方は何者なんです。私たちが今日ここに来ることなんて、当然誰にも分からないはずだ。なのにあなた方は、手を振りながら、まるで当たり前のように、海岸でこの船が着くのを待っていた。この船を出迎えに来たみたいだ。

シレノス 大神ゼウスのお告げにより、最初から知っておったのだよ。今日ここに、この船がやって来ることはな。

アケテス ゼウスさまの？

シレノス ああ。わしは、お前が背負っている神の古い知り合いなのだ。（ディオニュソスを見て）ああ、ザグレウスさま、顔かたちは変わってしまったが、やはりあなたはあなただ。懐かしい匂いがする。

アケテス ザグレウス？ この方はディオニュソスと名乗っていたぞ。

シレノス ディオニュソス……二度生まれた者という意味の名か。水夫よ、なるほど二度目に生まれたこの方の名は、ディオニュソスと言うのかもしれぬ。じゃがわしは、最初に生まれたときの、この方の知り合いなのだ。その時のこの方は、たしかにザグレウスという名前の神じゃった。

アケテス 二度生まれただって？ まったく、この神の複雑な境遇には、俺などには計り知れないものがあるな。

〔アケテス、完全にディオニュソスを二人に明け渡す〕

モルティ（シレノスに）もっとほら、私たちの肩に挟み込むようにして、そう（体勢が整う）。

シレノス 水夫よ、ではこの方は、わしらが預かっていくぞ。

アケテス ああ、俺が何も言わないうちから、キュベレー女神の名前を出してきた人たちだ。充分信用するに足りるだろう。もっとも爺さんは、どうやら人間ではないようだがな。

シレノス うむ。

アケテス ただこれだけは言っておこう。その方の狂気は、この五日の航海の間にどんどん酷くなっていった。衰弱もしているし、今ではわずかな会話も出来ないぐらいだ。そういう状態にあることだけは承知しておいてくれ。

シレノス 心得た。ではモルティ、いくぞ。

〔シレノスとモルティ、ディオニュソスを挟みながら歩きだす〕

アケテス（三人を見送りながら）幼き神よ、どうか自分を取り戻して帰ってきてください。

道ゆき

ディオニュソスを間に挟みながら歩き、会話するシレノスとモルティ。

シレノス（ディオニュソスを見ながら）本当に懐かしい。

モルティ まるで恋人を見るように見るんだね、爺さん。

シレノス 恋人？ ばかな、恋人などよりもよほど愛おしい。なにしろわしは、この御方の赤ん坊の頃を知っておるのじゃからな。まるで我が子のようなものだ。

モルティ 我が子ね。ふっ、ちっとも似てないが。

シレノス 似てたまるか。わしなぞに似ていたら気の毒じゃわい。

モルティ ふふふ、そりゃまったくだな。で、生まれ変わる前の、そのザグレウスだった時も、こんな風に可愛かったのかい？

シレノス うむ。なにしろザグレウスさまは、ゼウスとペルセフォネーとの間のお子じゃからな。かつては本当に、輝くばかりに美しい赤子であった。

モルティ エーと、ペルセフォネーというと。

シレノス ああ、偉大な母神に隠れてしまって、このフリギアまでは高名が届いておらぬか。ペルセフォネーは穀物の神デメテルの娘で、数多おる女神の中でも、その美しさにかけては、かのアフロディーテにも比肩しようという御方じゃ。

モルティ なら、その子供が美しくても当然か。

シレノス うむ。そして、そんなザグレウスさまを、わしとアテナさまが養育していたのじゃ。が……ある日のこと、ザグレウスさまは、ティターンどもによって八つ裂きにされてしまった。

モルティ 八つ裂き……そんなすごい話があったのに、今日まで私に教えてくれなかったのか。

シレノス こんな忌まわしい話、すすんで他人に話せるはずがない。もし、こうして復活したザグレウスさまを見ていなければ、わしは一生、このことを誰にも話さなかったじゃろう。

モルティ それもそうだ。で、ザグレウスは、八つ裂きにあって大怪我を負ったんだね。

シレノス 八つ裂きじゃぞ。怪我などで済むものか。あれは死んだと言ったほうがいい。八つ裂きにされた身体はティターンどもの餌食となり、残ったのは唯一心臓だけじゃった。

モルティ 間違いない。それは確かに死んでいる。

シレノス だが、その心臓は動いていたのだよ。トクントクンとな。じゃからアテナさ

まは、その心臓から、ザグレウスさまを再生できるのではないかと考えた。そうしてオリュンポスへ山と飛んだ。最高神ゼウスに、どうかしてくれと頼みに行ったのじゃ。

モルティ そうやって再生されたのが、こうしてあたしたちが支えているディオニュソスなのだな。

シレノス たぶんな。というのは、わし知っているのは、アテナさまがオリュンポス山に飛んで行ったところまでだからじゃ。それ以来、今日の今日まで、わしはザグレウスさまとは一度も会っていない。

モルティ それが今朝になったら急に海岸に行こうと言い出して、そうして海岸に着いたら、そこで、ザグレウスの生まれ変わりと再会したわけか。それもない話だな。

シレノス さっきの船乗りにも言ったが、明け方、夢枕にゼウス神が立ったのだ。「いま海岸に向かえばザグレウスに会えるぞ」とな。思えば、ゼウス神のお告げは、これで二度目じゃな。

モルティ 二度目？ 一度目は？

シレノス 一度目は八つ裂きの話のころ。心臓を運んでいくアテナさまを見送り、そのあと独りになった時のことじゃ。わしはアテナさまとザグレウスさまの帰還を待っておったのだが、待てど暮らせど、いっこうに二人は帰ってこなかった。その代わりにゼウス神が、わしの夢に現れたのじゃよ。

モルティ それが一度目のお告げだな。ゼウス神は何と言ったんだ。

シレノス こう言った。シレノスよ、フリギュアのキュベレー女神のところへ行き、そこに身を寄せるがいい、と。

モルティ ああ、そのお告げを聞いてのことだったのか。私が子供のころに、じいさんがキュベレー神殿にやってきたのは。

シレノス いかにも。そしてゼウスはこうも言っていた。「ザグレウスの本来の居場所は地下にある。そしてキュベレーこそは、その地下世界への門。ならばザグレウスが、キュベレーのもとを訪れない訳にはいくまい。また、そういうことであれば、お前がキュベレーのもとに身を寄せてさえおれば、いつかは必ずザグレウスと再会することになる」と。

モルティ それが今だというわけか。

シレノス（ディオニュソスを愛しげに見つめながら）そうじゃ。

キュベレー女神の神域

それまでの道のりが割合やせた土地だったのに対し、しだいに周囲の緑が濃くなってくる。また、その緑の茂みのあちこちに、幾対もの男女や雌雄（動物）がセックスしている姿がある。

シレノス ぼちぼちキュベレー様の神域に入ったらしいな。

モルティ どうやらな。

シレノス しかし、いつも不思議に思うんじゃが、キュベレーさまの神域に入ると、何だってみんな、こうも恥じらいがなくなるんじゃ？

モルティ なんだ、そんなことも知らないのか。というより感じないのか。

シレノス 感じないとは？

モルティ ……キュベレーさまが、大地と一体化している神なのは知っているよな。

シレノス うむ。言うなれば、わしらはキュベレーさまの体の上を歩いとるようなもんなんじゃろう。

モルティ そう。そして、そんなキューベレーさまの体から立ちのぼる芳香は、大地のうえを行き来する者にとっては、強力な媚薬ともなる。日暮れ頃には、決まってその芳香（媚薬）が立ちのぼるから、こいつにあてられた者は、みな相手を求めずにはいられなくなるんだ。

シレノス ほう。じゃあ、なんじゃ。今はお前も、わしが欲しくてたまらんのか。それは困るのう。わしゃもう、とっくにインポじゃわい。ワッハッハ。

モルティ それで感じないのか……困らなくていい。それより、キューベレーさまの媚薬を感じとる能力もないのに（＝インポテンツなのに）立派なスケベじじいなのもすごいな。

シレノス ほっといてくれ！

モルティ じゃあ私も放っておいてもらおう、スケベじじい。

シレノス 何がじゃ。

モルティ 何がじゃない。あたしが、どれほど長年キューベレーさまに仕えていると思ってるんだ。自分の性欲ぐらい、とうに制御できるようになっておるわ。

シレノス オヤオヤそれは残念だな。そのツンとすました顔がとろけるところ、わしも一度ぐらいは拝みたかったわい。

モルティ 諦めることだな。

シレノス あーあ、わしは祭儀への参加を認められていないから、マイナスたちのそう

いうところは、ぜんぜん見る事が出来ん。しょせんわしは神殿の従僕だからな。これがインボでなかったら、きっと地べたを這って悶えてるだろうよ。

モルティ 与太話はここまでだ。ほら、キュベレーさまの神殿が見えてきたよ。

シレノス ザグレウスさま、着きましたよ。

第8章 大地母神キュベレー

登場人物

キュベレー フリギュアの大地母神。大地母神とは、大いなる母のイメージを重ねられた大地の人格化と言ってよいだろう。本来キュベレーは美しき豊穡の女神であるが、ここでは声だけの出演となる。

シレノス かつてはザグレウスの子守役であったが、いまはキュベレー神殿の従僕として働いている。老いた半獣半人の牧神。

ティーシポネ 復讐女神エリニースの一人。鮮血のティーシポネと綽名されている。ただし本章で登場するのは、ティーシポネの本体ではない。ディオニュソスのブドウ酒に憑りついた、いわば分身のような存在。

マイナスたち キュベレーの祭儀を取りしきる、中心的な信女たち。巫女と言ってもよい。

モルティ マイナスの一人。シレノスと親しくしている。

男たち キュベレーの祭儀に集まった、男の信者たち。

女たち 右に同じく、女の信者たち。

ディオニュソス われらが主人公は、いまなお狂気の淵に沈みこんでいる。そのためここでは、気を失っているものとして台詞を持たない。外見としては、ボロボロになった女物の服を着ている。

☆ **アッティス** キュベレーの恋人。彼は冬になると、自ら去勢して死に（＝地下に消えて）春になるとキュベレー（大地）の力によって地上に再生する。つまりアッティスは、冬に枯死し、春に甦る植物の象徴なのである。

キュベレーの神殿

床が土間（地べた）の大きなホール。そこに数十人の男女が集っている。宵の口となり、これから祭儀が始まろうとしている。そこにディオニュソスの一行が到着。ディオニュソスの一行とは、我らが主人公と、その彼に肩を貸しているシレノスとモルティのことである。

キュベレー（ホールに響く声として）モルティ、ディオニュソスの服を脱がせなさい。そうして彼を、ホールの中央に寝かせるのです。シレノス、お前も奥まで来なさい。

シレノス え、いいんですか。これまでずっと、入り口付近までしか、立ち入りを許されてなかったのに。

キュベレー 構いません。こうしてディオニュソスが訪れた以上、お前もまた、彼と共に早晩ここを去ることになるでしょう。きっとこれが最後ですから、お前にも特別に、私の祭儀への参加を認めることにします。

シレノス ウヒョー、それは願ってもない。

〔モルティとシレノス、裸にしたディオニュソスを、ホールの中央まで運んでいき、地面に寝かせる〕

キュベレー（数十人の男女に）信徒たちよ、では始めましょう。

一同 謹んで享受いたします。

キュベレー とはいえ今日は、いつもとは異なり、ここに神の子が参られました。普段は私の香気があなた方を酔わせますが、今日は、この神の子の恵みによって酔うことにしましょう。せっかくですからね。

〔キュベレーがそう言うと、ディオニュソスの冠であるブドウの蔓が伸び、地面に突き刺さる。すると間をおかず、今度は地面からブドウの蔓草が生えてくる〕

一同 おお！

〔ブドウの蔓草は、すぐにたくさんの実をつける。ブドウの房が、幾つもぶら下がったということである。そして、その房は鮮血のような赤い色をしている〕

シレノス ブドウがなった。が……しかし、なんという禍々しい色じゃ。

キュベレー これでは駄目だわ。こんなブドウから垂れ落ちた汁を飲んだら、とても酔うどころの話ではない。きっと皆、すぐに狂ってしまうわ。モルティ、蔓の根元に、私の聖水をかけておやり。

〔言われたとおり、モルティが小さな壺から聖水を注ぐ。すると、ブドウの房から赤い霧が立ちのぼる。やがて赤い霧は形をなして、中空でティーシポネの姿となる〕

ティーシポネ（霧状ではあるが、実体のように悶えて）ぐ、うぐ、ぐう。

キュベレー お前は復讐女神の一人ね。でも、本体はとっくに冥府に戻っていて、ここに残っているお前は、その影に過ぎない身の上ではありませんか。それなのに、いまだにディオニュソスを強く苦しめているのですね。

ティーシポネ（やや苦しそうに）フン、私が離れようとしても、酒のほうが私を引き留めるのさ。この液体は、その本性からして、深く狂気と結びついている。復讐の狂気ともな。だから私を酒から追い出そうとしても無駄なのさ。

キュベレー 確かにあなたを排除したとしても、狂気が残滓は、いつまでも、この酒に付きまとうでしょう。けれどもね、そうやってあなたが直接とりついていたのでは、あまりにも、その狂気の度が過ぎるのですよ。だからあなたには、やっぱり、そこから離れてもらうことにします。

ティーシポネ 無駄だ。どうやっても私を追い出すことは出来ない。執念、執着、しつこさは、復讐女神にとり最大の武器なのだからな。

キュベレー 追い出したりはしません。あなたは私のなかで融けてしまうのです。

ティーシポネ とけるだと？

キュベレー ええ、そうです。なぜなら私は、すべての心と体を融かして一まとまりにする、どこまでも大きな器だから。

〔大地（床）から、熟れた果実のような芳香が立ちのぼる〕

信者の一人 おお、祭儀のときに匂ってくる、いつもの香気だ。

別の一人 私たちを酔わせる甘い匂いだ。

キュベレー マイナスたち、さあ、声を合わせて歌ってあげなさい。

マイナスたち（歌う）

すべての心と体を受け入れる、

どこまでも豊かな大地の母神。

復讐も、憎しみも、

狂気も、また殺意の凶刃でさえも、

すべてを許し切って受け入れてしまう女神の前では、

もはや何の力も保てはしない。

温い〔ぬくい〕泥に刃を立てようとしても、

泥はその刃ごと包んで呑み込んでしまう。

キュベレー（ティーシポネに囁く） 狂うほど誰かを憎むなんて、ああ、それ自体があまりにも可哀そうなことだわ。可哀そうな子、さあ私のなかで泣きなさい。

ティーシポネ 何を言っている。

キュベレー いいのよ。たとえあなたが針ねずみのように私を傷つけても、それでも私はあなたから離れない。だからあなたは、もう独りじゃないの。そばに私がいるの。待っている私がいるの。だから、ゆっくりと心を開きなさい。開いた心から涙を漏らしなさい。

ティーシポネ 何だ、やめろ、やめてくれ！

キュベレー どうしたの？

ティーシポネ ……力が抜けていくのだ。気を張っていないと消えてしまいそうだ。

キュベレー 実体でないあなたは、そのいきり立った心が萎えてしまったら、本当に何も残らないのね。だから素直になれない？ 消えてしまうのが怖い？ でもティーシポネ、あなたが消えても私が残るわ。

ティーシポネ なんだって？

キュベレー 私は残るの。あなたをも含んで永久に横たわる大地として。すべての死を取り込んで再生させる土として。その土は、いつかあなたのような、鮮血のような花も咲かせるでしょう。かわいらしい花を。赤くて美しい花を。

ティーシポネ（悶えながら）花などになるか！

キュベレー なるわ。なぜなら私は、たゆたう時間〔とき〕の果てしない海だから。その時間の大海のなかで、あなたの憎しみも悲しい出来事も、すべては淡い思い出へと変わってしまう。つらい出来事ほど、時間が経つほどに誇らしい思い出に変わるのだから、あなたが咲かせる花は、きっと、どんな花よりも凜として可憐に花開くことでしょう。

ティーシポネ そんな……

マイナスたち（歌う）

素直に涙を流せばいい。

無理などしなくていい。

私たちは、あなたのための安らいなのだから、

そこに憩って、

すべてを投げ出してしまえばいい。

ティーシポネ（泣きながら）だって誰も分かってはくれなかった。誰も優しくしてはくれなかった。私は暗いニュクス（夜）の子。気づけば辺りは暗がり、取り囲んでいる人たちの心は冷たかった。私はエリニウスとして生きるため、憎しみの心でしか、人と接することを許されなかった。

〔大地の芳香が、目に見えて、ティーシポネを包み込んでゆく〕

キュベレー 辛かったのね。分かるわ。辛かったのね。辛かったのね。

ティーシポネ 辛かったの。辛かったの。

キュベレー 分かったわ。あなたの悲しい涙を、すべて私に注ぎ込みなさい。

〔ティーシポネ、大粒の涙をボロボロ流す〕

キュベレー そうよ、それでいいの。あなたが流す涙は、すべて私が呑み込んでしましましょう。さあ、私にすべてを委ねなさい。

ティーシポネ ああ、自分が消えていくのが分かる。苦しい……苦しいけれど……でも、あなたなら信じてもいいのね。ああ甘い匂い。湿っていて優しい空気。こんな感じ、今まで全然知らなかったな。温かい……

〔ティーシポネ、その霧状の体が凝結して、一粒のしずくとなる。しずくは大地に落ちて小さなシミとなり、そのシミは小さな小さな植物を発芽させる。この植物はすぐに成長して赤い花を咲かせる〕

マイナスたち（歌う）

慈愛ぶかい母の前では、

憎しみも恨みも涙となって、

その涙さえ抱きしめられて思い出となる。

淡い思い出に。花のような美しい思い出に。

赤い花、赤い花、お前はかつて、

あの血の色のような憎しみだった。

〔鮮やかに咲いていた赤い花は、みるみるうちに枯れていってしまう。枯れた花びらは風に舞い、すぐに落ちて崩れてしまう〕

葡萄酒の恵み

気づけば、ブドウの房が落ち着いた紫色になっている。これはティーシポネの呪いから逃れた証拠である。ホール内には、甘い葡萄酒の匂いが立ち込める。

キュベレー（信者たち皆に）さあ、今こそディオニュソスの恵みに浴しなさい。ブドウの房から垂れてくる、甘露のしずくを飲み干しなさい。

男たち　なんと旨い飲み物だ。

女たち　お腹が熱いわ。

キュベレー（マイナスたちに）ほら、お前たちも飲むのよ。

マイナスたち（飲んで）ああ、おかしい気持ちになりますわ。

モルティ　自分を保てなくなりそう。

キュベレー　そして私も。さあ私に降りかかりなさい、熟れたブドウのしずくよ。地に沁み込んで、私の喉を潤してごらん。

〔酒が大地に沁み込むと、間を置かず、今度は地面からアルコールの匂いが立ち昇る〕

シレノス こりゃたまらん。しずくは飲んでないのに、たまらなく楽しくなってきたぞ。不謹慎じゃ不謹慎じゃ。ザグレウスさまは、まだ倒れてらっしゃるというのに、かつての子守役のわしが、こんな楽しい気分になるなんて。

モルティ じいさん、口元に布でも巻くか。あまり長持ちしそうにないが。

〔シレノス、マスクをするように、モルティに布を巻いてもらう〕

シレノス まあ少しは違う。

キュベレー あなたは心配でしょうね、シレノス。たしかにお酒に憑りついた呪いは浄化してあげました。けれどディオニュソス自身にかけられた呪いは、ええ、まだ全く元のままなのですよ。だから彼は、今も倒れたままにいるの。

シレノス それはキュベレーさまが、これからザグレウスさまご自身の浄化も執り行うという話ですか。

キュベレー いいえ、違うわ。私の力では、ディオニュソス本人の浄化は果たせない、そう言ってるの。

シレノス そんな……

キュベレー というのも、ディオニュソスはある意味、自分自身で呪いを抱きしめている状態にあるの。

シレノス まさか！ そんな馬鹿な話がありますまい。

キュベレー いいえ真実よ。つまりディオニュソスは、あまりにも辛い出来事を体験してしまった。そのため、この出来事を直視することを怖がってるの。そして、こうして狂ってさえいれば、つらい現実をハッキリとは受け止めずに済むでしょう。

シレノス ザグレウスさまに一体なにが。

キュベレー とても辛いこと……とても、とても。そしてディオニュソスの、この神の子の力はとてつもなく強い。彼が握っている手は硬くて、とても私にはこれを開くことが出来ない。だからディオニュソスの呪いは、けっきょく彼自身が対決して浄化するしかないものなの。

シレノス でも、それはどうやって？

キュベレー 彼本来の居場所で、それは明らかになるわ。

シレノス それはどこです。

キュベレー 地下よ。地の下の果ての果て、底の底、闇の闇。

シレノス それがザグレウスさま本来の居場所？

キューベレー ええ、そう。では、そこへ降りるための門を開く「キューベレーの秘儀」を執り行うことにしましょう。

キュベレーの秘儀

松明が消されてホール内が暗くなる。とはいえ、完全な暗がりではない。天井に小窓が開いており、そこから満月の光が差し込んでくるからである。そうした薄暗がりの中で、キュベレーが信者たちに呼びかける。

キュベレー 酒に酔って融けはじめた意識よ、

もはや意識とも呼べぬほどまどろんだ心よ、

見上げなさい、月が私たちを照らしている。

月の薄明りは、物と物を結びつける惑わしの光。

物の輪郭は、その柔らかな光のなかで融けだし、

曖昧になって、

ゆっくりと一つに混ざり合っていく。

私たちの心もまた同じ。

曖昧になって、

ゆっくりと一つに混ざりあっていく。

いまは酒の力が、

なおさら全てを混在させてゆくでしょう。

マイナスたち 一つになっている以上に、

私たちは、もっと一つになりたいのです。

となりの誰かと手が触れたならば、

それだけで私たちは、

その誰かと抱き合ってしまいたい。

深く交わって、融けて一つになってしまいたい、

そのように思ってしまうのです。

シレノス 変な気持ちだ。これが秘儀の始まりなのか。

キュベレー そうよ、シレノス。どう？ あなたたちの輪郭の一部（性器）が、したたる愛液によって滑らかになり、人と人とを結びつける糊を塗ったようになり始めてはいないかしら。そうなった時にこそ、みなと心と体がただ一つになるまで混在していく、この秘められた夜の祭は始まるのよ。

女たち 身体が熱く敏感になっている。男を受け入れたい自分がある。

男たち 熱い血で充たされたファルロス（陰茎）が女たちを求めている。

マイナスたち 女たちは大地、男たちは種。

だからもう、あなたがたは、

分別をもって相手を選んだりしてはなりません。

大地はすべての種を受け入れるのですし、

種は自然の力によって、

地に蒔かれるしかないのですから。

そう、あなたがたはもう、自然の似姿なのです。

女たち いま私に触ったあなた、来てください、受け容れましょう。

男たち ありがたい。その裂け目に俺を注がせてくれ。

キュベレー 性的オルギア、男女の狂躁、

それがキュベレーの秘儀。

ものを明確に分ける光、太陽、

その太陽が西に沈みきったとき、

この大いなる自然の祭は、

こんなにも艶やかに始まっていく。

モルティ（シレノスに）じいさんは独りなのか。

シレノス 立たぬわしのチ○ポに触れて、さっき女が笑って去って行きよった。

モルティ では私が相手をしてやろうな。こうして、ただ抱かれていればいい。私の温もりが、お前の心の癒しとなるだろう。

シレノス ありがたい。やさしいんじゃな、お前は。

モルティ ただし、これから祭は、急に激しさを増すことになる。私たち二人は、ホールの端のほうに逃げていることにしよう。

マイナスたち さあ、乱れて交わりなさい。

地震のように大地を揺らして、

荒野を耕すように、荒く、激しく。

愛液をたらして、精液をまきちらして。

〔男女が激しく交歓する〕

男たち 注ぎ込んでやる。注ぎ込んでやる。

女たち 来て。もっと欲しいわ。もっともっと欲しいわ。

キュベレー 男たちよ、決して自分の命を惜しんではなりません。彼女たちにすべてを、命のすべてを注いでやりなさい。

マイナスたち 男たちよ、

黒い大地は、豊かな緑色に変わるために、

お前たちが何億ともしれぬ、

あの種を蒔いてくれるのを待っている。

男たちのファルロスは、

女たちの子宮のうちに種をまき、

女たちは子宮のなかで、優しく、

その種を若芽になるまで育てる。

かの胎児という名の若芽に。

わが子という名の若芽に。そして、

この若芽が膺からその首を出したとき、

大地はそこだけ、軟らかな緑色に染まる。

キュベレー けれど、けれど私は豊穡の女神。

決して、ささやかな程度の緑では、

この大いなる心を満足させることは出来ない。

私が欲しいのは森、もっともっと濃い緑。

マイナスたち だから皆の者たちよ、

もう自分の心さえ忘れてしまって、

かえって、そう、

自分の身体に支配されておしまいなさい。

キュベレーさまの秘儀は肉体の祭。

心はその付属品に過ぎない。

男たち ザーメン（種）を噴く直前、俺たちは限りなく純粹に身体だ。

女たち 感覚が頂点に上りつめるとき、私たちに心などありません。

キュベレー それでよいのです。

お前たちが心を失うとき、

その肉体を満たすのは自然の摂理。

いまお前たちの肉体は、まさに、

大地の一部と化しているのです。

男たち だから激しく。

女たち 獣のように。

男たち 種を蒔くために。

女たち 緑にするために。

〔方々から獣の咆哮のような声が響く。絶頂のけいれんが、地震のようにホールを揺らす。キューベレーの身体でもある地面（ホールの床）は崩れて泥のようになり、男女は、なかばその泥に埋まりながら交歓を続ける。果てた男女の傍らからは幻影の草木が生え、辺りは次第に、深い緑色へと染まっていく〕

開門

ついには原生林のように繁ったホールに、腐った果実のような、甘く胸につかえるような匂いが充満する。それは地面から立ち昇ってくる匂いであり、同時に、大地の裂け目から漂ってくる匂いでもあった。その裂け目の真上ちかくに、我らがディオニュソスは横たわっている。

キュベレー 人々の興奮が私の体を柔らかくさせ、私をも欲情させ、ついには大地の陰門を開かせました。

シレノス まさに御開帳じゃ。

キュベレー そしてディオニュソス、あなたは眠ってはいるけれど、まだ子供ではあるけれど……あなたの本質は、かの竿立ったファルロスの衝動そのものなのです。ですからあなたは、今こそ私の陰門を貫き、その奥で精を放ちなさい。あなたの精を、本質を、地下の最深部で思いきり解き放つのです。さあ、ディオニュソス。

〔ディオニュソスの体が、大地の裂け目のなかに呑み込まれていく〕

シレノス ザグレウスさまが地下に。

モルティ キュベレーさまご自身が、アッティス以外の誰かを受け入れるところなど、はじめて見たわ。

〔ディオニュソスの体が、完全に見えなくなる。暗転〕

戯曲 デイオニュソス 闇の神性 II

著 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
